Osaka University Knowledge Archive

Title	専門学校生のキャリア意識の研究 : 再チャレンジ戦略に注目して
Author(s)	上田, 勝江
Citation	大阪大学教育学年報. 2013, 18, p. 63-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24311
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

専門学校生のキャリア意識の研究
―再チャレンジ戦略に注目して―

上　田　勝　江

＜要旨＞

本稿では、専門学校生の入学、学び、進路決定の３時点に注目し、彼らのキャリア意識の分析を通して、専門学校の社会的機能の検討を行った。

インタビュー調査結果からは、次のようなことがわかった。まず、入学動機としては、自己表出型、止まり木型、職業資格活用型、教育資格活用型の４種類に分類できた。専門学校経由の大学編入に魅せられて入学する者もいた。次に専門学校生の学びプロセスは、もがき型、知識吸収型、全人発達型、異邦人型に分類できるが、全人発達型が多数であった。専門学校生は、知識習得を行って職業資格を獲得することのみに邁進するのではなく、学校生活の中で、他の学生との交流、実習、教員との交流の中で、自己覚醒していくパターンが多かった。専門学校経由の大学編入生は、メリトクラティックな学歴競争に煽られていた。

進学者の実学志向と高学歴志向を反映して、専門学校は、職業資格取得と教育資格取得の機能を強化していた。多くの専門学校生は、資格と学歴を取得することにより、よりよい就職先やより威信のある大学に進学することを目標としていた。それは、勉強への挫折感や嫌悪観を克服し、再チャレンジを果たす意味合いを持っていた。

キーワード：専門学校、キャリア意識、進路形成

1. 問題設定 ― 専門学校の社会的機能の変化

高校の個性化・多様化政策や、経済不況による就職氷河期の到来により、高校、大学、就職という多くの若者がたどってきた進路に対する価値観は変化してきている。少子化による大学の学生数が減少する一方で、専門学校への進学率が上昇し、ここを活用した非伝統的な進路形成の拡大は、そうした変化の一つの表れといえよう。例えば、職業経験の後に専門学校で学び直すパターンや、大学・短大に在学中に専門学校へ通うダブルスクール、短大や高専、あるいは専門学校からの大学編入など、従来のストレート進学だけでなく非伝統的な学習ルートとして活用されている。いいかえると、専門学校は、職業教育機関であるがそれを超える学習要求に応えており多岐にわたる教育機能を持っているといえよう。

専門学校への進学率をみると、新規高校卒業生は16.8％で、量的には大学に次ぐ第２の進路となっている。入学者約25万人の内訳は、新規高卒者が17万人、大学・短大等の卒業者が約２万２千人、残りの約５万人が職業経験のある者や短大・大学の中途退学者である。全体の約３割が職業や高等教育を経験した後の学び直しと推察される層で占められている。

専門学校は学校教育法の定める１条校ではない。単線型の教育体系から外れたところに位置し、正規の学校を補完することで社会的な役割を果たしてきた。それゆえ、専門学校の社会的機能は、教育政策や経済環

境によって大きく変容せざるをえない。1980年代の専門学校は、政府の大学の質的充実（量的抑制）政策によって、増加しつつあった大学進学希望者を吸収し、量的に拡大していった。1990年代前半から、18歳人口減少し大学進学が容易になると、あふれた大学希望者を受け入れる役割は薄れていく。この頃、専門学校の進学者数が最大になった。量的拡大を果たした専門学校教育を評価するかたちで、数々の法整備がなされた。1994年に、一定の要件を満たす専門学校修了者に「専門士」の称号を付与する制度が創設され、1998年には学校教育法等の一部改正で、専門学校卒業生の大学編入学が可能となった。2005年には、一定要件を満たす専門学校卒業者に「高度専門士」称号を付与し、大学院入学を認める制度が創設された。大学との接続が強化されたのである。大学編入に関しては、施行最初の年は490人が専門学校から編入学し、2009年は2500人台となっている。専門学校全体の編入者が占める割合は決して大きくはない。しかし、短期高等教育機関である短大や高等専門学校が編入者を増加させていることを考慮するならば、専門学校は今後、大学へのバイパスとして重要な進路の一つとなっていくと考えられる。

さらに、一部の専門学校では、提携した短大や大学の授業を併修し、高等教育の卒業資格を取得することも可能となっている[(1)]。これは、専門学校本来の役割ではなく、むしろ大学や短大教育の下請的な役割といえる。高学歴志向の強まりを背景に、大学編入ルートの開拓や短大・大学の併習などの教育資格取得機能を強化しているのである。

また何より強化されているのは、職業教育の機能である。長引く不況や２度の金融危機を経験し、就職難や失業問題がクローズアップされてくると、若者たちの間に実学志向ないし職業教育志向が強まってきた（天野　2002）。吉本（2009）によると、資格ないし検定の取り扱いの学科も持つ私立の専門学校の割合は60.9％、民間資格・検定を取り扱う学科を持つ専門学校は33.9％である。私立の専門学校の約９割が何らかの資格に関する教育を行っている。

現在の専門学校では、高学歴志向と実学志向を反映して、教育資格取得機能と職業資格取得機能とをいっそう強化させているのである。

2. 先行研究

ところが、これまでの専門学校生に関する研究では、専門学校は大学へ進学しない層が、学歴よりも手に職を目指す進路という枠組みでとらえられてきた。苅谷・濱中（2002）は、大都市圏の進路多様校と呼ばれる普通科高校生を対象に、進路意識の特徴と行動を、質問紙調査から明かにした。大学や短大進学者は、学校的価値に信頼があり、社会に出ることへの不安を感じる層が、さらなる学歴を身につける手段として進学するのに対して、専門学校進学者は、将来志向を持ち適性把握ができているタイプもしくは、現在志向でメリトクラシーに対して親和的でないタイプが多いとしている。さらに、荒川（2007）は、個性化・多様化政策が、高校生の学習態度や進路意識に与える影響を検討し、高校の選抜・配分機能がいかに修正されたのかを明らかにした。その中で、「興味・関心」「将来の夢」を重視した進路選択を行った結果、実現可能性の低い職業（ASUA職業）[(2)]を目指す「夢追い型」生徒の進学先として専門学校を位置づけている。これまで成績下位者に対して働く冷却メカニズムが、高い進路をめざす競争に参加させながら、達成可能な進路をわからせる冷却（cooling down）であったのに対して、興味・関心に向けていつしか業績主義的な競争から撤退させる冷却（cooling out）に変化しているとしている。

一方、植上（2007、2011）は、専門学校進学を主体的な進路選択の結果ととらえ、専門学校進学者へのインタビューから、キャリア形成意識と学びについて検証した。彼らは、①勉強への嫌悪感と向き合いつつも、

②具体的なキャリア形成要求を持って入学しており、③大学進学の代替的なものとして一括りにすることはできないと指摘している。さらに、専門学校の教育を、正規の学校教育では対応しきれない分野に対応し、それが生徒の学びを回復する機能をもちうるとしている。関口（2001）は、全国の専門学校350校、在学者５万2024人に対して、入学や学校生活に関する実態に関する大規模調査を行った。専門学校生の入学目的は、職業資格と専門知識を獲得し、就職に備えることが一般的で、学校生活を楽しむや友人をつくることは２次的なものとして捉えている。また、大学進学か専門学校かの選択基準は、進学する学科が大学と競合しているか否かによって差異がある。例えば、コンピューターなどの大学と競合する学科の専門学校生ほど大学進学を強く意識する一方で、美容師など専門学校がプロパーの学科では、始めから専門学校に的を絞って進学を決定している。学歴に対する意識も同様で、大学と競合する学科の生徒ほど、社会で認められるためには学歴が必要とする意識が強い。専門学校がプロパーの学科では、学歴よりも実力を重視する意識が強い。

上記の先行研究から、専門学校への進路選択がどのような意識のもとでなされたか読み取れる。すなわち、苅谷・濱中（2002）、荒川（2007）は、高校生の進学意識に注目し、従来の業績主義的価値観を持たず、自己実現を追求する生徒の進路先と捉えるのに対して、植上（2007、2011）、関口（2001）は、専門学校生のキャリア意識に注目し、将来展望を持った生徒の主体的な進路選択だととらえ、入学後の社会化の過程も視野に入れて検討している。本稿でも、高校卒業から専門学校入学後の学びまでの過程を射程に入れて、専門学校生のキャリア意識を描きたい。ただし、手に職をだけを目指すのではなく、学歴獲得にも高い関心を持つ層だとみなし検討したい。

これらをふまえて本稿では、専門学校生の入学、学び、卒業後の進路決定の３時点に注目し、彼らのキャリア意識のパターンを検討する。

3. 調査概要

3-1　調査校の概要

以上の先行研究の結果をふまえて、語学系のA外語専門学校、系列のB美容系専門学校、Cコンピューター専門学校３校の生徒および専門学校関係者にインタビュー調査を行った。インタビューは、2010年の７月から現在まで、３校の在校生、卒業生および学校関係者計20数名に対して、一人1,2時間程度の半構造的インタビューを行なった。なお、インタビューが十分でなかった場合は、後日メールにて質問状を送り回答をいただいた。

対象校を概観すると、この３校は、大阪を本拠地とする大手語学系専門学校が経営している。筆者が19年講師を勤めるA外語専門学校は、ビジネス関連の職業教育から大学編入学科を取り扱う教養系の専門学校である。B美容系専門学校では美容師、メイクからモデル学科まで幅広い学科を有する。Cコンピューター系専門学校は、情報系の学科が主であるが、ゲーム学科からシステムまで扱う学科は幅広い。３校とも職業に直結した国家資格や民間資格の取得に関係する学科を多数取り扱っており、短大や大学の併習が可能である。通常の２年コースに加えて、３年、４年と長期のコースを有している。入学者は新規高校生が約７割、残りの３割を、社会人や短大・大学生、フリーター出身などが占める。

進学者の高校階層は把握できないため、新規高校卒業者の高校階層を調査した乾（2003）の調査を参考にすると、専門学校進学者は約９割が全日制普通科高校出身である。偏差値階層別に卒業者が占める割合は、難関校（偏差値69-73）が0.4％、上位校（63-68）が4.2％、中位校（上）（58-62）が7.2％、中位校（中）（53-57）が16.0％、中位校（下）（48-52）が28.9％、低位校（43-47）が30.6％、底辺校（38-42）が23.3％となっている。

偏差値階層でみると、中水準から低水準の高校からの進学者が偏っている。ここでは、専門学校は、進路多様校とされる中位校から低位校からの進学者を多く受け入れていることを押さえておく。

3-2　分析項目

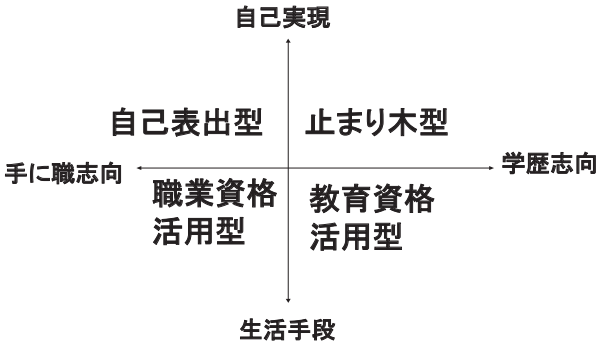
分析項目は、1.専門学校生の入学動機　2.専門学校生の学び、3.卒業後の進路を決定する意識である。このことは、次のような意義を持つ。まず第1に入学動機であるが、多様化・個性化政策の結果、教育の目標をよい学校に行ってよい地位を得るといった価値観から、生きがいやりがいといった自己実現を重視する価値観へ変化している。将来の進路を選びとる意識も多様化したことは想像に難くない。また、高学歴志向と実学志向が高まる中、彼らはどのような目的を持ち専門学校に入学しているのだろうか。第2に専門学校の学びのタイプであるが、ここでは大学進学と専門学校の基準を視点に分析を試みる。大学入試選抜が容易になっているにもかかわらず、専門学校を選択する目的は何か。あるいは大学・短大を卒業後あるいは中退後に進学する目的は何か、専門学校のどういった側面が彼らを惹きつけているのだろうか。第3に卒業後の進路を決定する意識であるが、自己実現的と現実をどのようにすり合わせているのか、卒業後の進路を決定した要因は何か、これらの3項目を検討することで、専門学校生のキャリア意識の変化のパターンを明らかにしたい。そして、中等後教育段階の多様な進路実態をとらえることが本稿の目的である。

4.　専門学校生のキャリア意識

4-1　専門学校生の入学動機

専門学校生の入学動機を類型化すると、「**自己表出型**」「**止まり木型**」「**職業資格活用型**」「**教育資格活用型**」の四つを見出すことが出来る。縦軸には自己実現志向と生活手段的志向を、横軸には手に職志向と学歴志向とした。それぞれの特徴を述べ、事例を見ていこう(3)。

図1　専門学校生の入学動機のタイプ



自己表出型：自分のやりたいことは何か、どんなことが向いているかを考え、進路を「将来の夢」や「興味・関心」に従って追求していくタイプ。自分が好きなこと、興味のあることだけをやりたい。無駄なことはやりたくない。

止まり木型：特にやりたいことが見つからないため、とりあえず進学して、進路決定を先延ばしにするタイプ。モラトリアムが強い。自己分析が不十分で、自分の将来に対する展望・意欲があいまい。

職業資格活用型：職業に関連のある資格を取って、就職段階でのステップアップを目指す。なりたい職業が明確。進路に対する迷いはない。上昇志向が強い。
教育資格活用型：現役で目指していた大学よりもランクの高い大学への進学を目指す。偏差値偏重の価値観を持つ。教育アスピレーションは高い。

4-1-1　自己表出型の事例 ―「興味・関心」を追求する

＜④さとみさんの事例＞

さとみさん、26歳は、短大卒業後にC美容系専門学校ネイルアーティストコース卒業後、ネイリストになった。現在同専門学校で常勤講師を勤める。さとみさんは、中・高一貫校の私立に通った。高校時代から美容に興味がありすぐに専門学校へ進学を希望した。「美容では食べていけない」「短大を出たほうが卒業後の進路が広がる。」という親からの説得で、併設の短期大学へ進学した。そこで、家政科の教員免許を取得。しかし、短大在学中も美容に進みたいという気持ちは変わらず、卒業を待って専門学校へ入学した。ネイルだけをやりたいという強い気持ちを彼女は次のように語る。

☆筆者　短大の時に（ネイリスト志望は）変わらなかったのですか？
さとみ：結構強くなりました。どんどん。・・・ネイルをやりたいというのは揺らぐことがなかったです。

短大卒業後、親から「進学」を薦められたが、大学へ行くという選択肢は彼女にはなかった。

さとみ：全然なかった。勉強は嫌いだったので。興味のあることをしたい。がんばるんだったら手に職をつけたいと思った。美容だったらちゃんと技術もって、就職したらなんとか食べていけるという自信はあったので。（中略）でいろいろ考えてネイルだけしたかったんでこの学校を選んだんですよ。

勉強がきらいだからという意識は、専門学校を選択する大きな要因になっている。彼女は、短大の卒業資格を得、家庭科の教員免許を取得し、専門学校を選択している。④さとみさんは、自己実現を追及するために学歴という保険をかけている。

＜⑦匠君の事例＞

匠君22歳は、私立中・高一貫高校出身である。同級生のほとんどが大学へ進学し、高校の進路指導も大学進学を優先する中、なぜ大学へ行かなかったのかを次のように語る。

匠：中高一貫校やったんで。周りは完全に大学へ行く、目的なくても大学に行くんですけど。僕は違ってコンピューターしたいというのがあったんで。それやったらとことんそれだけを勉強したかった。大学ていろんな他の事も単位とらなあかんてことがあったら、それは無駄じゃないですか。コンピューターをしたかったというのが一番、高校のときはそれしか言ってなくって。・・・（先生には）大学行けて相当説得されたんですけど。

匠君の専門学校進学は、コンピュータのみを勉強したいという自らの「興味・関心」を優先した結果である。それゆえ、大学での教養教育は無駄と映っていた。また、彼は中学受験を失敗し、第２希望の私立中学へ通っていた。学歴競争の最初のレースともいえる中学受験の失敗は、その後の高校生活に大きな影響を与えることになっていた。併設の高校へ入学した匠君は、遅刻や欠席が多く、成績も下降した。「下から数えた方がはやいほうやった」と振り返る。

匠：（大学進学は）思わなかったですね。成績悪かったっていうのもあったんですけど。・・・そら僕がもの、すごい勉強できていい大学に行けて、そういう選択肢があったら、もしかしたら大学ていう道もあったかもしれないですけど、（中略）それやったら別にそこらへんのちょっとがんばったら入れるような大学行って、いろんな事勉強しながらコンピューターの勉強するんやったら、やっぱり専門学校で勉強したほうがいいんじゃないかと僕は考えたんです。・・・（先生には）大学行けて相当説得されたんですけど。

彼はまた、成績が悪いため威信の高い大学へ行けそうもないことを、専門学校選択の理由にあげる。家庭においても、「後で後悔するぞ」と強く大学をすすめられていたにもかかわらず、「後悔したらしたで、ええか。」と親の反対を押し切った。

匠：親は多分、僕高校のときもあまり成績よくなかったし、遅刻とかも結構してたり、欠席とかも多かったりしたので、どうせ専門学校行っても遊んでるんやろと思われてて。まず、見返したろと思ったんです。絶対に。

「見返したろ」という言葉が端的に言い表しているように、彼の進学動機は、学業不振だった高校時代をやり直して専門学校で再スタートを切ることである。まとめると、「自己表出型」は、好きなことだけをやりたいための専門学校選択で、大学での教養教育は無駄と考えている。また、勉強に対する劣等感も強い。しかし、里美さんの好きなことで身を立てたい、匠君の親を見返したいなど、専門学校選択を積極的なキャリア形成の場ととらえている側面が伺える。

4-1-2　止まり木型の事例 ― とりあえず専門学校へ

進学率の上昇で学校での在学期間が長くなるにつれて、モラトリアムはますます延長されるようになっている。大学生の間でみられたモラトリアムであるが、専門学校においても同様の傾向が見られる。

＜⑨真一君の事例＞

真一君、18歳は、大学編入コース１年に在籍。学校が斡旋する寮に一人暮らし。生活費はバイトで賄っている。高校時代も学費、携帯代など全部バイトで捻出した。彼は、友達からＡ専門学校で編入があると聞き、パンフレットを見て入学を決めた。４月１日であった。やりたいことがいっぱいあって、わからないと語る彼は、大学編入コースに決めた理由について

真一：正直言って高校卒業してすぐ働くっていう勇気もなかったし。高校出てすぐ働く奴、めっちゃすごいなと思いましたし。そんな勇気なかったし。

<⑪学君の事例>

学君、29歳、大学編入コース。高校を中退後、カナダの高校へ。帰国後、大学に入学するも中退。大学進学を強く望んでいた父親の死がきっかけである。金銭的な理由ではなかった。20歳前後の生徒が多い中、年上の彼はクラスでも異色であった。彼の専門学校進学動機は、

学：親に（大学）出ておいて言われたから、でも（オレは）やめさしてくれと。ちょっと考えさしてくれと。（中略）で、いろいろ当たって考えて、英語は勿論やりたかったけど、なんやろ、進学も出来るし。英語でこの専門学校見つけたから。大学へ編入できるし、他のことも出来るやん。で、気分変えて。

大学へ編入しようと思った理由について

学：親かな。自分より親やな。オレは別に（大学）出んでもいいと思った。専門学校行っている間にちょっと考えも変わるかなと思ったし。で、大学編入も出来るし、英語も出来るし。進学も考えているからとりあえずここ行こと。それがここに来たきっかけ。

真一君は、学費や生活費を自分で賄いながらの進学である。一方、学君は、親からの強い勧めに促されるように進学を決めた。二人とも、大学に行くことを切望しているわけではない。やりたいことを見つけるためとりあえず専門学校へ入学している。

4-1-3　職業資格活用型の事例 ― 手に職をつける

<⑤由紀子さんの事例>

由紀子さん20歳は、高校卒業後、４年制大学を受験するも失敗した。短大卒業後、再び希望の大学への編入試験を受けたが失敗。母親のすすめで３月31日に専門学校進学を決意した。現在、エアラインコース１年生。

由紀子：・・・・どうして良いかわからなくなって。家でボーとしたりしていたんです。・・・母は私がしたい仕事に就いてほしいとすごく思ってくれていたので、ちゃんとした仕事に就くために専門学校に行ったらと言ってくれて。・・・・最初は来年また編入めざして、ここから１年勉強して行くのもいいんじゃないと言ってくれたんですけれど、ここに個人面談に来た際に、それだとお金も時間もかかりますしというのを聞いて、ここで２年エアラインを勉強してもう就職しようと決めました。

大学編入を目指していた由紀子さんは、短大では英語を専攻していた。高校時代も短期留学を経験し、英語に興味があった。英語が得意であると、ＣＡ（キャビンアテンダント）なる確率が高いことなどを説明会で聞き、就職することを決意している。

<②真由美さんの事例>

真由美さん19歳は、Ｂアーティスト専門学校の２年生である。美容師になるための国家資格の取得に励む。高校３年生になり、美容師か保育士か迷った彼女は、

真由美：最初は美容師か保育士で迷ってて。高校で進路で先生に絞ったほうが良いと言われて。高校３年になって。小学校から髪をアレンジしあうのが好きだったんです。自分の好きなことで人を癒してあげられたり、笑顔にしてあげられたらいいんなというのがあって、美容の専門学校にはいって美容師になろうと思いました。

大学進学は考えなかったのかという筆者の問いに、「お兄ちゃんは、大学に行ったけど」と前置きし、

真由美：大学進学は無かった。勉強があまり得意なほうじゃないので。美容が好きだったてこともあるんですけど。親にお金を出してもらって大学で勉強したいことが無かった。進路を考えたときに、先に就職ということを考えて、将来何になりたいかによって決まるじゃないですか、どういう学校に行くか。美容師というのがあったので、専門学校になったんですけど。大学という考えはなかったです。

真由美さんは美容系の専門学校出身である。美容師は専門学校がプロパーの教育分野であるため、大学か専門か進学の迷いない。学歴よりも手に職を求める意識は強い。比較的早い段階から、美容師という具体的な職業のイメージを持って進学している。一方で、編入に失敗した由紀子さんは、大学の代替え的な進路として専門学校を選択している。まとめると、「職業資格活用型」は、卒業後に就く職業を具体的に持っており、生涯に渡って有効な資格や職業に直結した知識を習得したい意識が強い。

4-1-4　教育資格活用型の事例 ― 学歴獲得競争に再挑戦する

＜⑩瞳さんの事例＞

瞳さん。20歳。A外語専門学校、大学編入コース２年。進学校であったが、高校卒業後はPerforming Artを学ぶため渡米。現地の専門学校へ入学、合計で２年ほど滞在。帰国後、編入コースへ入学。国立大学へ編入合格。

瞳：うちは、みんな大学行く高校やったんです。・・・向こうで（アメリカの専門学校だが、生徒は主に日本人であった）理不尽なこと言われるのですよ。‥やはり、大学へ行こうと決めたんです。

志望校についても、

瞳：いろいろなこと勉強したい。私哲学やりたいんです。興味があって。院にも行きたいと思います。東大の大学院に行きたいと思ってます。あそこがトップやから。目指すなら上行きたいです。（中略）名古屋大学受けるのも、旧帝大系やったら東大（大学院）にも入りやいって聞いたからなんですよ。そうなんですか？

＜⑬隆一君の事例＞

隆一君。23歳。A語学系専門学校　大学編入コース卒業。公立外語大学を卒業後、運輸関連会社勤務。現役時大学受験にすべて失敗。親は浪人させないと言われたが、専門学校からの編入を選択した。

隆一：説明会で「大学編入は競争相手が少ない」「受験科目が少ない」「３年から入学すれば現役で入学した人と一緒に卒業できる」というメリットがあることを知りました。（中略）浪人か編入

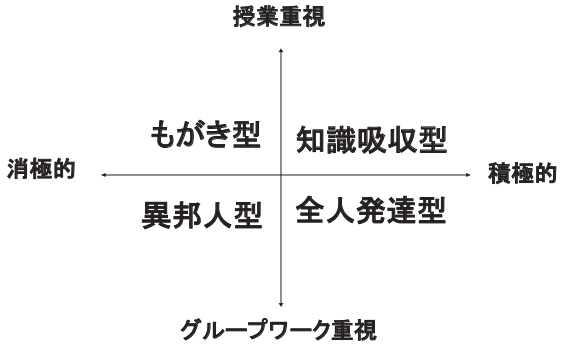
かどちらかが合格する確率が高いかを考えたときに出た結論が大学編入コースに進学するというものでした。

大学編入を目指す生徒は、就職か進学かという迷いは少ない。現役とあまり差がでない、勉強する科目が少ない点などが考慮され、大学進学への最短ルートととらえられている。業績主義的な価値観を持ち、学歴獲得に熱心な層は、これまでの専門学校には見られなかったタイプである。

4-2　専門学校生の学び

図２のように専門学校生の学びのタイプを分類すると、次の四つの生徒像が浮かび上がってきた。「もがき型」「知識吸収型」「全人発達型」「異邦人型」である。たて軸を授業重視とグループワーク重視、横軸は、勉強に積極的か消極的かにした。それぞれの特徴を述べ、事例を見ていこう。

図２　専門学校生の学びのタイプ



「**もがき型**」：自分のやりたいこと自分に合っている進路は何かを捜し求め､進みたい道を常に模索している。学校でも学校外の活動でも、とにかくやってみて夢中になれることを探す。アイデンティティを追求するタイプである。

「**知識吸収型**」：やる気は人一倍あり、予習・復習ともに一生懸命する。目標に近づくため、授業を完璧にこなすタイプ。学校生活で一番鼓舞されたのは、授業内容である。

「**全人発達型**」：習意欲も高く、課題も完璧にこなす。学校生活で友達、先生などのさまざまな人との出会いから多くの学び、励まされ成長していると感じている。授業よりもむしろ、学校生活から自らの成長を実感した。

「**異邦人型**」：教育内容、先生、友達などの関わりを通して、あまり影響を受けなかったタイプ。専門学校生活においても自分自身は何も変わることが無かったと感じている。

4-2-1　もがき型の事例 ― 納得したい

＜⑫しおりさんの事例＞

しおりさん（美術教材会社勤務、26歳）語学留学した後、大学編入コースに変更した。「とりあえず留学しかしたいことかやりたいことが無くって」入学した彼女は、３ヶ月のオーストラリア留学からかえってきて、「さて、何しよ､」と２年時の進路に迷う。

しおり：・・・私最初日本語教師がいいと思ったんですよ。その次に思ったのが、ジュニア（子供英会話の講師）かなと思って。結構しゃべったんですよ、担任の先生と。帰ってきてから。ああでもないこうでもないって。やりたいこと何やねんて。結局大学に行きつくんですけど、やっぱりお金が無いのジレンマのぐるぐるで。

専門学校生の多くが、なりたい職業や進路に合わせたコースを選択することになる。しかし、中には、入ったコースになじめなかったり、自分のやりたいことと異なると感じた場合は、コース変更をすることになる。変更先では、共同作業が多く、少人数でクラスの連帯感が強いため、なじめない場合は、退学にいたる生徒もいる。

4-2-2　知識吸収型の事例 ― メリトクラティックな学歴競争に邁進

＜⑩瞳さんの事例＞

瞳さん（大学編入コース）は、受験が近く、１日10時間以上勉強している。専門学校で一番影響を受けたのは授業内容だという。

瞳：私は大学で授業を受けたことがないけど。（中略）ここの授業はすごい。・・・英語は時事的なことも出るので、英字新聞読んだり、単語は増やしています。ハーバード白熱教室のランデル教授の授業よりもためになります。・・・あと２週間後はもっと集中モードに入る予定です。受験は一度も受けたことないから、すごい不安です。・・・・第１志望が一発目にあるんです。

＜⑬隆一君の事例＞

隆一君（大学編入コース）は、教養的な授業や資格教育に刺激を受けている。

隆一：大学で学ぶ教養が学べるところです。それとパソコンのスキルや、英検などのスキルを高める授業を受けることができたのがよかったです。３校合同の授業もありましたし編入の勉強をしながら資格を取ることができたのは良かったです

編入の勉強をやり始め、国公立進学に焦点を絞った瞳さんの教育アスピレーションは上昇し、メリトクラティックな学歴獲得競争に邁進している。

4-2-3　全人発達型の事例 ― 自分が変わる

＜⑦君の事例＞

匠君は、コンピューターのことだけしたい「自己表出型」で進学した。あった。入学後に取得した国家資格はおよび検定は、17個（当時）。専門学校中では２番目に多かった。しかし、一番印象に残ったことは、資格ではなく、先生との関わりをあげた。また、一番成長したと思うことに、任されたシステム制作を友人と共同で作り上げたことだという。

匠：在学中、３年の時に後輩が受けている授業のシステムを僕とＦ君が全部つくったんです。（中略）何でも新しいことに挑戦しようと思ったものがあったんで、そこで一番成長したかなと。あと、

先生に遅くまで教えてもらった。9時まで教えてもらったことがあります。分からんから教えてくださいといって拒否する先生はいなかったです。

＜⑬隆一君の事例＞

隆一君は、授業以外の行事や年上の友達との交流、先生との距離が近かったことが良かったと言う。

匠：体育祭や授業を通して他のコースの友達が出来たのもよかったと思います。・・・これまでは同じ歳の子との付き合いしかなかったのが、専門学校に来て年上の人ともかかわる機会が持てました。これは専門学校卒業後に感じたのですが、先生との距離が近かったことがよかったです。・・・多くの先生にしつこいくらい質問しました。・・・それが自分の力になったと今でも実感しています。

学校から職業への移行期に、社会化の機能は重要である。友達や講師とのかかわりが、将来のキャリアを形成するうえでの糧になりうると思われる。

4-2-4　異邦人型の事例 ― 何にも影響されない

専門学校入学後、学校生活にとりたてた変化はなく、自分自身もなんら影響を受けなかったら「異邦人」タイプの学びの事例を見てみよう。

＜⑪学君の事例＞

学君は、「○○家の男子やから大学くらい出ておいて」という親の意向で、大学編入を選択したが、本人は大学進学にこだわっていない。勉強は好きでないし、学校で勉強はしないという。

学：勉強はあまりすきじゃないよ。ダラダラやってるんよ。なのに大学行く理由何やろうなと思って。・・・専門学校に入学して自分が変わったかなと思うことは無いんとちゃう。まあやらなあかんていう意識くらいちゃう。

＜⑨一君の事例＞

真一君も同様に、

真一：生活とか考え方とか、高校時代と比べてあまり変わったことは無いかもしれない。しいて言えばやりたいことが増えた。いろんなことを知れば知るほどやりたいこと増えていくんです。・・・(家で) 大学編入の勉強は全然していないです。

学君、真一君は、２人とも入学意識は、「止まり木型」で、明確な目的を持たず入学し、大学編入コースを選択していた。

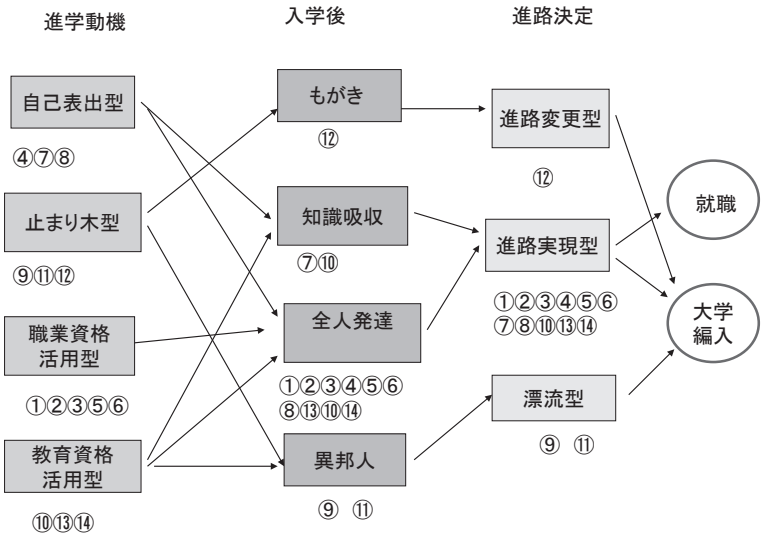
専門学校生の学びは、「もがき型」「知識吸収型」「全人発達型」「異邦人型」の４つの類型を見出した。今回のインタビューで一番多く聞かれたのは、「全人発達型」の学びであった。知識習得を行って職業資格を獲得することのみに邁進するのではなく、学校生活の中で他の学生との交流、実習、教員との交流の中で自己覚醒していくパターンが多かった。一方で、「もがき型」は自己実現を追求するあまり進路決定が困難と感じる場合がある。「異邦人型」は、今回大学編入を目指す生徒にみられ、勉強に対する意欲が著しく低い

ことも特徴である。

4-3　専門学校生のキャリア意識のパターン

図３のように卒業時の進路決定に至る意識の過程を「進路変更型」「進路実現型」「漂流型」の三つに分類した。特徴をのべ、事例を見ていこう。

図３　専門学校生のキャリア意識のパターン



進路変更型：なりたい職業や目指したい進路が、専門学校生活の中で変化し、入学時に選択したコースを変更するタイプ。専門学校では珍しい。
進路実現型：専門学校での学びや仲間や先生との学校生活により、目指した進路に一直線に進むタイプ。
漂流型：トコロテン式に押し出された進路形成。積極的に進路を選びとるよりもむしろ、入学したコースをそのまま進んだタイプ。

4-3-1　進路変更型 ― やりたいことをしたい

＜⑫しおりさんの事例＞

しおりさんは、語学留学した後、大学編入コースに変更した。コース変更した後も、大学で何をするかを探しもがき続ける。

しおり：（留学から）帰ってきてからいきなり受験英語をやるでしょ。私大嫌いで、受験英語。（中略）みんな、大学行く子ってそうやと思うんですけど、別に何々になりたいから大学へ行きますっていう子じゃないでしょ。それがおかしいよね、いややなと思って。（中略）クラスのみんなは、大学で何々するから大学へ行くんじゃなくって、大学へ行ったら有利そうやし、みたいな。どう考えても大卒のほうがお給料いいし。私は、ほんまにやりたいことすることしか出来ない人やから。

4-3-2　進路実現型 ― 目的に向かう

＜②真由美さんの事例＞

多くの専門学校が、あらかじめ将来の仕事を想定して学科や授業内容を想定している。しかしながら②真由美さんは、「教科書に書いていないこと」を学んだと話す。彼女の言う教科書に書いていないことは、主に先生からの言葉である。「自分の物差しで人は測れない」や「自分の気持ちは人の心を映す鏡」と言われた言葉を忘れず、職場でも活かしたいという。美容師を目指す真由美さんは、就職も決まり確固としたキャリア像を持っていた。

真由美：物差しはこれからどんどん増やして行きたいと思うし。初めて人会うときもずっと物差しのことは考えていきたいと思う。入社したら、お客さんとか先輩とかも始めて関わる人が増えてくると思うんので、それを意識していきたい。（中略）それが良好な人間関係から自分も笑顔になれて人も笑顔にしてあげて、良いサイクルにしていけるように学校で学んだことを生かして行きたいと思います。

また、①里香さんは、美容師になることに迷いはなかったと言い切りった。

里香：専門学校はちょいちょい選択授業とかいろいろありましたけど、やっぱり最終、国家試験目指してっていうのが一番大きかったですね。・・・美容師になる道は１個なんで。

4-3-3　漂流型 ― トコロテンのように押し出される

＜⑪学君の事例＞

学は、「止まり木型」でとりあえず進学し、「異邦人型」で何も変わらず、そのまま卒業した。意識面や生活面でも変化したことはないと言う。

筆者：今まで一番変わったと思う時代はいつ？
学：変わった？・・なんやろな。あんまり変わってないと思うんやけど。
筆者：専門学校卒業してからは？大学生だし会社社長だし。
学：変わったこと。別にあんまりないけどな。やってることは違うけど。今は、自分で行動し出したから。それの吸収はかなり大きい。

学君の専門学校進学は、親や周りからの強制されたもので、彼にとっては義務でしかなかった。しかし、卒業後にむしろ、積極的なキャリア意識が生まれている。

5. まとめと考察

本稿では、専門学校生の入学時、学び、卒業後の進路決定の３時点に注目し、彼らがどのような目的を持ち入学し、卒業後の進路決定にいたるキャリア意識のパターンを検討した。

まず、入学動機は、「自己表出型」、「止まり木型」、「職業資格活用型」、「教育資格活用型」の４種類を見出した。専門学校生の入学動機の特徴は、「職業教育活用型」の意識が強いことであろう。長引く経済不況

や就職氷河期の到来で、生徒たちに生涯有効であるような資格が必要になるという思いが広がっている。大学でも資格教育が行われているが、2年という専門学校の時間的、経済的メリットが、進学動機の一つとなっている。また、見逃せないもう一つの特徴は、好きなことのみを勉強したいという「自己表出型」の意識が強さである。荒川（2009）も指摘するように、高校の多様化・個性化の進行で、従来の業績主義的なものから、興味・関心を重視する価値観の変換が図られた。専門学校生の多くが、興味・関心を追求するために専門学校を選択していた。あまりにも自己表出的な意識が強いため、大学での一般教養が無駄とらえられていたケースもあった。このように「職業教育活用型」や「自己表出型」に意識は、荒川（2009）や植上（2007）らの先行研究と同様の結果であった。だが一方で、これまでには見られなかったような新しいタイプの意識も確認できた。「教育資格活用型」「止まり木型の意識」である。「教育資格活用型」の生徒は、偏差値偏重の業績主義的価値観を持つ。大学編入を目指す生徒はより威信の高い大学を目指し、メリトクラティックな学歴競争レースに邁進していた。また、「止まり木型」のモラトリアム意識は、従来大学で見られたタイプの意識である。1980年代の専門学校は、大学進学がかなわず専門学校へ入学した不本意入学も多かった。しかし、大学全入時代を迎え、不本意入学は少なった。代わってすぐに就職する勇気はない、やりたいことを見つけるなど、進路決定を先延ばしにするモラトリアム傾向が強くなっている。これは、就職を意識する教育機関であった専門学校においては大きな変化である。

次に、専門学校生の学びプロセスは、「もがき型」、「知識吸収型」、「全人発達型」、「異邦人型」に分類できるが、全人発達型が多数であった。関口（2000）の調査では、専門学校生の入学動機は、就職の準備と資格や知識の獲得が第一で、学校生活を楽しむことは二次的なものととらえられていた。しかし、今回の調査においては、専門学校生は知識習得を行って職業資格を獲得することのみに邁進するのではなく、実習や他の生徒や教員との関わりの中で自己覚醒していくパターンが多かった。異年齢の集団で協働作業を行なう実習などは、大学とは異なるタイプの学びのであろう。

最後に、卒業後の進路決定は、「進路実現型」、「進路変更型」、「漂流型」の3種類を見出した。最も多かったのは「進路実現型」の意識である。彼らは、専門学校の学びを通じて職業観を熟成させ将来の進路をより明確にしていた。一方で、自分のやりたいことを追求するあまり進路が決定できない「進路変更型」も見られた。専門学校では特定の職業を想定して入学するため、入学後の狭い教育内容に自分が合わないと感じる生徒も多い。カリキュラムがタイトなため学科を変更することがしばしば困難で、途中で学校を止めてしまうことも多い。また、なんとなく卒業する「漂流型」が、大学進学を目指す生徒に現れていたのは特徴的である。学歴を取得したいわけでもなく、モラトリアムの意識も少ない「漂流型」の生徒が、高学歴志向に浮遊するように専門学校から大学へ進学していくのである。

彼らの入学動機は、学びのタイプに強く関連づけられていた。最も一般的なキャリア意識のパターンは、「職業資格活用型」と「教育資格活用型」の入学動機から「全人発達型」の学びを通って「進路実現型」に至るパターンである。専門学校生の入学動機は、資格や学歴を取得し希望の進路に進むためであった。したがって、大学で学ぶような一般教養は必要ないという意識が強かった。しかしながら、入学後は異年齢の友人や先生との距離の近さから「教科書以外のこと学び」（②真由美）、自分自身が変わったと感じていた。また、同じ目標を持つ友人や先生との関わり、実習での協働作業を通じてアスピレーションを上昇させていた。荒川（2009）が指摘したような、業績主義から離脱した「夢追い型」の進路意識はあまり見られなかった。むしろ適正把握を行っているタイプが多く、みずからの進路希望を実現するため教育機関として積極的に捉えていた。これは苅谷・濱中2002）や（植上　2011）に共通するものである。

以上の結果から、専門学校生のキャリア意識には「合理的」「学び直し」という二つのキーワードが浮か

び上がってくる。進学者にとって、専門学校は資格や学歴が取得可能で、なおかつ興味・関心を満たす進路と映っていた。しかも、大学よりも短い２年間で学ぶ。自らのキャリアを時間的、経済的側面から最短ルートで実現しようと考えた時、専門学校は非常に「合理的」な進路なのである。

また、高校時代の成績不振に対して劣等感を持っている専門学校生は多く、卒業後に資格や学歴で大きくステップアップしたい意識が強いのも特徴の一つである。⑦匠君の「見返したい」という言葉が象徴しているように、専門学校では、高校時代の「学び直し」を行い、再チャレンジを果たす意味合いが強かった。

本稿で見てきた専門学校生のキャリア意識のパターンは、資格と学歴取得に強い意識を持ち、再チャレンジを目指す課程でもあった。その中で、多くの専門学校生が影響を与えた「全人発達型」の学びは大学や短大とは異なる種類のものである。

一方で、大学編入を目指す生徒に見られた「止まり木型」の入学動機から「異邦人型」の学びそして「漂流型」に至るキャリア意識のパターンは特徴的である。とりあえず進学し、何も学ばず、大学へ押し出される。高等教育の大衆化によって、本来ならば就職したであろう層も大学を目指すようになった。このような非伝統的な進学者が、専門学校からの大学編入というルートに現れていると推測される。「漂流」する進路形成の在り方は、職業教育機関としての専門学校には無かったものである。この層に対する検討は今後の課題としたい。

＜注＞

(1) 産業能率大学・通信教育課程および自由が丘産能短期大学・通信課程と提携する専門学校は、全国で96学校が公表されている。系列の専門学校も入れると、全国ではさらに数が増すと考えられる。このような短大・大学併修が可能な専門学校は教養系や情報系の専門学校だけでなく、美容系や音楽系など栄養系などさまざまである。

(2) 荒川（2007）は、高校生の間で人気が高いが、実際にはなれそうもない希少な職業を、人気（Attractive）・稀少（Scare）・学歴不問（Uncredentialized）と定義している。

(3) 調査対象の基礎データ（データはすべて聞き取り調査時点によるものである。）
インタビューは20数名に行なったが、今回分析対象の基礎データのみを記載する。

氏名	学科	入学年度	性別	年齢	学年・現在	入学前学校歴	進路形成過程
①理香	美容科	2002	女	26	美容師	高校・低位	職業資格→全人発達→進路実現
②真由美	美容科	2009	女	19	２年生	高校・中位	職業資格→全人発達→進路実現
③朋子	美容科	2009	女	19	２年生	高校・低位	職業資格→全人発達→進路実現
④さとみ	ネイルアーティスト	2005	女	26	専門学校講師	短大	自己表出→全人発達→進路実現
⑤由紀子	エアライン	2010	女	20	１年	短大	職業資格→全人発達→進路実現
⑥ハル	エアライン	2010	女	22	１年	大学中退	職業資格→全人発達→進路実現
⑦匠	ネットワーク開発研究３年	2007	男	22	IT会社勤務	高校・上位	自己表出→知識吸収→進路実現
⑧直太郎	ゲーム開発エキスパート４年	2007	男	22	４年生	高校・中位	自己表出→全人発達→進路実現
⑨真一	大学編入	2010	男	19	１年生	高校・下位	止まり木→異邦人→漂流
⑩瞳	大学編入	2009	女	21	２年生	高校・上位	教育資格→知識吸収→進路実現
⑪学	大学編入	2006	男	29	大学生・会社経営	大学中退	止まり木→異邦人→漂流
⑫しおり	大学編入	2007	女	24	会社勤務	高校・中位	止まり木→もがき→進路変更
⑬隆一	大学編入	2007	男	23	会社勤務	高校・中位	教育資格→全人発達→進路実現
⑭哲三	大学編入	2007	男	24	市役所勤務	高校・中位	教育資格→全人発達→進路実現

注）年齢や状態は聞き取り時のものである。高卒の場合のみ高校の偏差値階層を示す

＜参考文献＞

天野郁夫　2002 「高等教育の構造変動」『教育社会学研究』第70集
荒川葉　2009 『「夢追い」型進路形成の功罪』－高校改革の社会学―　東信堂
乾彰夫他　2003 「『世界都市』東京における若者＜学校から雇用へ＞の移行過程に関する研究『東京都立大学教育研究室教育科学研究』20号
苅谷剛彦・濱中義隆他　2002「大都市圏高校生の進路意識と行動」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第42巻
関口義　2001 『専門学校在学者の実態と意識に関する基礎的、総合的な調査研究報告書』京都文京大学
植上一希　2011 『専門学校教育とキャリア形成』大月出版
吉本圭一　2009 『専門学校の職業教育に関する総合的調査研究報告書』九州大学　専門学校教育研究会

A Study of Career Consciousness of Vocational college students in Japan

UEDA Katsue

This paper explores how the career consciousness of vocational college students is defined, and what kinds of school experiences influence their career perspectives. The study is based on a qualitative analysis of students' narratives.

The survey used in this study was based on a questionnaire developed by Sekiguchi in 2001. A total of 52024 students from 350 vocational colleges in Japan completed the questionnaire for the present study. Thereafter, semi-structured interviews were conducted among of 21 vocational college students and 3 teachers from three vocational schools in Osaka, between July in 2010 and November in 2012. These participants were questioned as to (1) their reasons for attending a vocational college and, (2) the influences on their career paths.

The major findings of the study are as follows— First, students attending vocational schools wanted to obtain not only vocational credentials but also academic ones, such as junior college and university degrees. Second, some of the students were under suspension, and, they did not want to work or stay at school. On the other hand, students who wanted to transfer to university were attracted to meritocratic values. Cramming for entrance exams was also appealing for students, while cooperative work experience and teachers enhanced their aspirations. These results indicated that educational reform, the popularization of higher education, economic recession, and difficulties in finding work had a great impact on students' career consciousness. Learning at vocational schools signifies "re-living high school" and students think of it as "re-starting". Following this analysis of qualitative data I aim to undertake quantitative data analysis in 2013

The study also indicates that vocational college provide many curricular, which helps students make career path in post secondary education.

Keywords: -vocational college, career consciousness, career path